

書 評

モーリス・ドップ著『社会主義論』

Argument on Socialism, by Maurice Dobb. London :

Lawrence & Wishart, 1966. 64p.

重 田 晃 一

1

この小冊子は、社会主義の理論と運動に関する知識の普及をめざして企画された「現代社会主義叢書」(Socialism Today Series)の1冊として著者により新しく書き下されたものである。著者、ドップはこの叢書のために、すでに『資本主義——昨日と今日』〔玉井竜象訳、合同出版社刊〕(*Capitalism, Yesterday and Today*, 1958)、『経済成長と低開発国』〔宮本義男訳、合同出版社刊〕(*Economic Growth and Underdeveloped Countries*, 1963)の2冊を執筆しているから、これが3冊目であって、その点われわれは啓蒙家ドップの活動の側面にももう少し注意を払う必要があるだろう。

仮りに本書の表題を「社会主義論」と訳すなら、あるいはそこでは現実の社会主義体制の諸問題が論議の俎上にのせられているかに予想されるむきもあるかもしれないが——かくいうわたくし自身もそうであった——実際の内容はそうではない。かつて1930年代にストレイチイは『なぜ社会主義をえらぶか』(*Why you should be a socialist*)という啓蒙的小冊子を書き、わが国でも戦後邦訳されて多くの読者をつめたが、本書はドップの「なぜ社会主義をえらぶか」にあたるといってよい。数少ない英米のマルクス経済学者のひとりとしてつとに名声を博し、いまやよわい65歳を過ぎたかれが社会主義者としてなにを考えているのか——本書をひもとく興味のひとつはその辺にあるといってよからう。

2

本書は5章からなっているが、議論の粗筋をたどるとほぼつぎのようにならう。まずはじめに、種々の論拠——人間固有の利己心と私的所有との結合にもとづく経済システムの

効率性の主張、完全競争モデルの仮定のもとに展開される資源の最適配分と効用の極大化論など——にもとづく資本主義肯定論が批判的に吟味され（第1章）、ついで資本主義の最大の問題点が搾取と不平等という二大事象にあることが明らかにされる（第2章）。だが資本主義の否定面を摘出したからといって、ひとはそこから社会主義の選択を一義的に帰結できるであろうか。必ずしもそうとはかぎらないのであって、いわゆる第3の途が考えられるかもしれない。こうしてかれは種々の形態の小所有者の社会への復帰論と混合経済論の2つをとりあげ、その実現可能性と問題点の吟味にとりかかる（第3章）。混合経済論の核心のひとつは私的セクターと公的セクターとの結合その他の手段にもとづく経済計画の導入にあり、それによって資本主義の長所と社会主義の長所との累積的效果の実現を期待するのだが、現実には両者の弱点が複合的に露呈されはしないか、ドップはこう考える。私的セクターが優位を占める社会では、一方で搾取と不平等とが、したがって階級対立が依然として除去せられないばかりか、他方せっかくの経済計画も結局は効力を発揮しないままで終わるか、あるいは公的セクターともども、私的独占の支配強化のための手段に転化するだけのことであろう。混合経済論批判として、かれは以上の点を強調する。

いわゆる経済計画が混合経済の下でこうむっていた弱点と限界とを突破してその本来の機能を自由に発揮しうするためには、生産手段の総体が社会的所有に移されなければならない。だがこのことは、資本主義の社会主義への転化を意味するはずである。こうして第4章では社会主義の基本問題が論じられる。

まずはじめに、かれは社会主義の下での経済計画の利点として、(1)独占による生産制限とそれにもとづく独占利潤の収奪などの弊害を除去しうること、(2)社会的費用と社会的厚生をめぐる問題——いわゆる社会的資本の充実や公害をめぐる問題など——がはじめて合理的に処理しうること、(3)各経済単位の経済的決定があらかじめ相互に正確に予測でき、したがって相互の計画的な調整が可能になること、(4)その結果、長期的な計画に短期的な諸計画を従属させ、後者を前者の手段に転化させることでもっとも効率的な成長政策を立案し、これを実施できること、などの諸点をあげている。他方、いわゆるオートメーション時代の開始は想像もつかぬ程の生産力の開発の可能性を約束しているかにみえるが、ドップの考えによれば、現状の下では、その急速な現実化は大量の失業の発生その他の問題をうみだすおそれがあり、この懸念は旧設備の陳腐化をおそれる資本の側の消極的態度の一面とあいまって、いわゆるオートメーション技術の自由な発展に一定の限界を与えることになるであろう。この限界も社会主義的計画経済の下ではじめて克服できるの

であって、社会主義こそオートメーション時代にふさわしい経済体制だということになる。社会主義についてこういった結論を出した上で、かれはさらに経済計画の実施にあたっての中央集権か分権かをめぐる問題、社会主義の下での新しいインセンティブの形成の問題について簡単に論じて本章を閉じている。

ドップにとっては、社会主義的計画経済のシステムは低開発国にとってもっとも有効な経済開発の方式であるばかりでなく、これこそ先進資本主義国が久しく悩んでいる経済成長の停滞から脱却し、国民全体の経済厚生を急速に向上させるための最良の方式なのである。ところで、ジョン・ロビンソンはかねてより低開発国については社会主義的計画経済への途を、先進資本主義国については資本主義の修正による混合経済と福祉国家への途を予想し、両者の平和共存に世界の今後の活路を見出していた。本書そのものでは直接に彼女の见解に言及はしていないけれども、著者の社会主義論の力点の置き方から考えて、本書全体の狙いは彼女に代表されるこういった世界の未来像を打破することにあつたといつてよいのではあるまいか。

それはともかく、先進資本主義国の将来の進路もまた社会主義の方向にあるとするなら、この社会主義への移行は現実にはどのような経路をたどるのか。「『社会革命』か『漸進主義』か」、「平和的移行か暴力的移行か」——しばしば蒸し返されてきたこの2つの問題を検討することで（第5章）、かれはこの小冊子の全体をしめくくっている。

結論的にいうなら、かれは社会革命の立場に立って、改良をその構成契機とみなしている。他方、支配階級側の態度いかんによるという厳格な条件をつけた上で、第二次大戦後の社会主義体制の発展とイギリスの民主主義的伝統とを考慮に入れつつ社会主義への平和的移行を見通している。ここにはマルクス主義の変革の理論の最大公約数が示されているといつてよい。と同時に、より具体的な、生き生きとしたヴィジョンに欠けていることは否みがたい。例えばその正否はともかく、先進資本主義国の社会主義への途としてつとに提示されながら、いまだ結着のつかない問題にいわゆる構造改革論があるが、この問題についてかれはどう考えるのであろうか。

3

さきと同じ叢書のために執筆された『資本主義——昨日と今日』が資本主義経済の理論的特質の究明とその歴史的過程の叙述とを交互にないまぜながら資本主義の本質と現象諸形態とを平易に解説したものであつたとすれば、本書はこの前著、とりわけ終章における

第二次大戦後の資本主義の現状分析を前提に、高度に発達した資本主義国の社会主義への移行の要請の思想的理論的根拠と展望とを明らかにしようと試みたものといえることができる。他方、『経済成長と低開発国』では問題の焦点はひとまず経済成長とそのため経済開発の方式をめぐる問題に絞られているものの、最大の狙いは、低開発国のもっとも効率的な経済進歩のコースが社会主義の方向にあることを主張することにあつたといつてよい。ドップの観点に立つなら、現代という時代は資本主義から社会主義への移行期なのであつて、以上の3つの小冊子は、啓蒙書の形はとっているけれども、実はこの世界史的課題にそれぞれ別個の角度から照明を投げ、それらをひとまとめにすることによって現代世界の全体像を描き出そうと試みたものと考えられてよい面がある。

だがなお問題は残されてはいすまいか。例えば近年の中ソ論争、ソヴェトにおける利潤導入を中心とした経済改革の試み、連日新聞紙上ににぎわせている中国のいわゆる「文化大革命」など一連の諸事象に示されるように、かれの提示する社会主義の理念像と現実の社会主義との間には相当のギャップがあるようにおもわれ、このギャップのよつて来る所以とそれの解消の方向とが明確に示されるのでないかぎり、せつかくのかれの主張も充分に説得的とはいえず、かれの狙う現代世界の全体像の構成もまた欠陥をまぬがれがたいであろう。かれが西ヨーロッパ有数のソヴェト研究者であり、社会主義経済論の専門家であるだけに、一見ないものねだりに似たこの願いもまたゆるされるのではあるまいか。

それはともかく、本書がかれの旧来の所説の集成であつてとくに目新しい論点が提示されていないとしても、著述の性格上、当然のことであろう。だが、痛烈ではあつても内容空疎なフレーゼを洗い流して、ことがらの核心を説き来り説き去る筆の運びには滋味あふるものがある。40有余年にわたる理論上の研鑽は永年の風雪に堪え抜いた生活体験に裏打されて、ここでは思想は牢固不拔の信念にまで結晶していつつくしくすらある。議論の細部はともかく、後学のひとりとして畏敬の念を禁じえない。